昭和からの伝言７（完）
サンフランシスコ講和条約
戦後日本の出発点 ―苦悩の吉田茂首相―

土田　良吉

サンフランシスコ平和条約とは第二次世界大戦後の１９５１年（昭和26年）に市の中心街にあるオペラハウス（ウォーメモリアル・オペラ・ハウス）で、日本とアメリカとの間で結ばれた講和条約のことです。

※サンフランシスコ条約、サンフランシスコ講和条約とも呼びます。当時、日本の首相であった吉田茂が、世界49カ国との間で平和条約に調印しました。

この49カ国とは、日本と第二次世界大戦で戦った国々を指します。１９５１年９月８日に調印、翌１９５２（昭和27）年４月28日発効になりました。この条約により我が国は連合国による占領が終わり、独立国として主権を回復しました。

そのとき、吉田茂首相は「戦争では負けたが、外交には勝てた」と胸を張りました。当時、私は２６歳、軍役を解かれ復員して６年が経っていた。自分を含め当時の若者たちが敗戦の屈辱にニヒルな思いでいた頃サンフランシスコ平和条約が成立発効。情報が淡いなかでも寛大な条文を見て、国民みな自信に胸を躍らせ、どれ程勇気づけられたことか！

それから70年近く経って、ＮＨＫテレビで講和条約調印にいたるまでの、吉田首相の苦悩の日々を詳しく放送されました。今の日本人にとって、決して忘れてはなられない貴重なメッセージが含まれています。

骨子を採録しました。次をお読み下さい。

司会「東京日本橋に建つ三井本館。この建物には戦後日本を占領したＧＨＱ（連合国軍総司令部外交局）があった。昭和26年1月29日、ここで、日本の独立回復を懸けた講和の初交渉が行なわれたのです。先に姿を見せたのはジョン・フォスター・ダレス。アメリカが派遣した特使です。少し遅れて時の総理大臣吉田茂が現れた。敗戦から既に６年、独立を念願する日本に対してダレスは、講和の実現に向けて、ある条件を突きつけてきます。

「日本は独立、独立ばかりを口にするが、その前に自由主義陣営の強化に、どうゆう貢献をするつもりなのかお聞きしたい」と、これに対し吉田茂首相は「再軍備に関する真意をお知りになりたいのであろうが、今、

再軍備を進めれば日本の自主経済は不能になる。対外的にも再軍備に対する危惧もある」と、応えた。
　前年に始まった朝鮮戦争。冷戦戦争が強まる中アメリカは日本を自由主義陣営に組み込むべく、再軍備を求めてきたのです。
　アリゾナ大学教授のマイケル・シャラーさんは、「ダレスの希望は30万の軍隊でした。あの時、日本が30万の軍隊を作っていたら、実際の戦争に参加させるよう圧力を掛けてきたに違いありません」と言っている。戦後の日本は、占領政策を主導するアメリカの要求に応じ、武装解除による非軍事化を進めてきた。しかし講和交渉に当たって当のアメリカが、その方針を大きく転換して来たのである。
『ただ拒むだけでは念願の講和が遠のいていく。厳しい選択に直面し、苦悩する吉田首相であった』
　今回、ＮＨＫスタジオには昭和史（歴史・政治・軍事）に精通した論客が集結。吉田の苦悩に鋭く迫った。
小谷賢（軍事）「20万なり30万の部隊を作ると朝鮮戦争に流用されてしまう恐れがある。これは吉田が最も恐れた事であった」
井上寿一（歴史）「吉田にとっては国家的な独立が何よりも大事であった。再軍備なんか、やりたくてもできないし、やりたくもない、その点ははっきりしていたと思います」
宮崎哲弥（政治）「アメリカと吉田の思惑がすれ違っているわけです」
　近年の研究で吉田が、ダレスの再軍備要求をかわすため、さまざまな案を用意していたことがわかってきました。それは会談の直前、アメリカの雑誌に寄稿した論文で、吉田は「日本の防衛を国連軍に委ねる」と述べました。しかし日本を共産陣営に対する防波堤にしたいという考えのダレスは譲らなかった。
　当時、吉田が抱えていた苦悩を物語るテープがアメリカに残されている。その中で「日本は、とても再軍備できるような状態ではない、戦前の過ちは軍備の重さが引き起こしたのだから」と英語で言っている。
司会「**アメリカの要求を前に吉田が下した苦渋の決断とは？**　戦後日本の出発点となったサンフランシスコ講和への道を探る。吉田茂独立への苦闘」。「敗戦後、日本が占領から独立を回復し国際社会に復帰した平和条約に至るまでを見てまいります。主人公は時の総理大臣。サンフランシスコ講和を実現させた吉田茂です」。
磯田道雄（歴史家・静岡文化芸術大学教授）「まだ乾ききっていない日本の歴史を探ってみたいと思います。

サンフランシスコ講和条約というのは、今日の日本の在りかたの根本を決めたものです。これを見ないと、今の日本というのは分らないと思いますね。吉田さんは一言で言うのは難しいですが、やっぱり親しみ易い人ユニークな人というイメージがありますね。しかし、その背後にある吉田の面白さっていうのは、私ね、彼の書簡はどんなに崩して筆で書いても読める。この人はひょっとすると文字の骨組み、文章の骨組み、外交文脈の骨組み、主流と言うものがはっきり分る人なんだと思います。骨の部分を見極めたら、くそ度胸で外交・政治を進めるタイプの人間、世の中の潮流の主流は何か見極めて、外交なり・国益を損なわないようにする、というような点では非常に傑出した人物であったと感じますね」

司会「では、その占領下の日本で吉田茂はどのように講和を実現させようとしたのでしょうか。時系列を追ってみましょう」

―東京有楽町にある日本外国特派員協会で―

司会「昭和2年3月17日、この協会で世界を驚かす会見が開かれた。その時の写真で左から3番目が連合国軍最高司令官のダグラス・マッカーサー。普段会見をしない事で知られていたマッカーサーだが、記者たちに語りかけたのは『日本の民主化は進み懸案の非軍事化も順調である。一年以内に占領を終わらせたい―』という考えだった。

日本外国特派員協会チャールズ・ポロメイさんは『ずっと米軍が駐留していると日本は成長できない、とマッカーサーが思っていると僕は思うのです』と語っている。GHQによる占領開始から1年6ヶ月。この発言で日本国内では、独立回復への期待が高まっていった。朝日新聞は『対日講和の機熟す。1年内に交渉を確認・占領の建設段階は終わる』と報じた。

―戦争放棄を謳った日本国憲法（昭和21年11月3日公布）―

この制定に関わったのは、時の総理大臣吉田茂だった。この日の吉田茂の応答「私共は全力を挙げ、相携えて誠意に応え奉る覚悟でございます」と。吉田は戦前、外交官として軍部と対立しながら、戦争終結を模索していた、その当時『負けっぷりを良くしようではないか』という言葉を肝に銘じていたとされている。敗戦で焼け野原となった日本、戦災孤児が巷にあふれ、日々食べるものにも事欠くこの日本を立て直す。そのためには一刻も早く独立を達成し、戦後復興に邁進するというのが吉田の考えだった。そんな吉田にとって

『1年以内に講和を示唆したマッカーサーの発言は』願ってもないものであった。　しかし、戦後、急速にアメリカとの対決姿勢を強めていたソ連が強行に反対。盛り上がっていた講和ムードは急速に萎んでいった。その後ヨーロッパで激化した東西の冷戦。ソ連によって東欧諸国が共産陣営に組み込まれる一方、アメリカを盟主とする西側、自由主義陣営がこれと激しく対立する事態となった。

遠のいていた講和の動きに変化の兆しが現れたのは、昭和24年11月、アメリカ国務省が、対日講和草案を準備していると報道されたことである。深刻化する冷戦の中、アメリカ国務省は西側陣営を束ねる形で早期に講和を実現させ、日本を確実に自由主義勢力に組み込みたいと考え始めていた。占領開始から4年目再び日本国内では独立への期待が高まった。

しかし吉田は慎重だった。実は吉田には気がかりな事があった。それは洩れ伝わってくるアメリカ国防総省の反対である。既に中国大陸では、共産主義を掲げる中華人民共和国が成立。冷戦がアジアにも押し寄せる中、日本の独立を認めてしまうと日本に、アメリカ軍基地をおく名目を失ってしまうと危惧したのである。このまま国防総省が反対を続ければ、講和交渉はいつまで経っても始まらない。吉田は一計を案じた。もっとも信頼を寄せていた大蔵大臣池田勇人(はやと)を密使としてアメリカに送ることにしたのだ。

永年吉田を調べていた國學院大學純教授柴田真一は「池田の次女紀子さんのもとに吉田書簡92通が残っている。その中に父の渡米6日前に届いた書簡がある」というのを知った。

その書簡の内容であるが、吉田『ご渡米後もこの点パプリシテイ特にご用心あれ、決して記者たちに悟られてはならない』と強い警告が記されている。

柴田さん「やっぱり吉田にとって講和条約に向けて、ここが正念場、しかもこれには「夜認める」と書いていますから、恐らく一寸心配になって、念のために秘書に持たせて注意を喚起しておこうという、吉田の決意と配慮がにじんだ手紙ですね。そんな感じがします」

昭和25年4月24日、GHQから経済視察という名目で渡米の許可をもらった池田はアメリカへと飛んだ。池田が面会したのは、GHQの経済顧問を務めていたジョセフ・ドッジ。ドッジ氏は国防総省にも通じ幅広い人脈を持っていた。そんなドッジに対して池田は、吉田から托されたひそかなメッセージ『講和条約を結んだあとも、アメリカは軍を日本に駐留させる必要が

あるだろうが、もしアメリカからその希望を言い出しにくいのなら、日本政府から提案してもよい』を、渡した。吉田は国防総省が望むアメリカ軍の日本駐留を、日本側から申し出ることで、事態の解決を図ろうとしたのである。

戦後の、日本関係に詳しいアリゾナ大学教授のシャラーさんは吉田の考えについて「吉田は、とても賢明な方法を選んだと思います。何故なら、当時、国務省、国防総省、ＧＨＱの間には微妙な綱引きがあり、公式ルートでは、中々事態の打開が難しい状況に陥っていたからです。メッセージの内容も強硬だった国防総省の懸念を払拭するもので劇的な効果を生んだのです」と語っている。国防総省の軟化を受け、遂に**アメリカ政府は講和に向かって取り組む決断をした**のです。

司会「様々な専門の分野からお集まりの皆さんから、ご意見を承まわる事にします。まずは早期に講和を実現させたい、という吉田の思いに迫っていきたいと思います。まず井上さん、吉田の思い、目的、思惑をどうお考えでしょうか？」

井上寿一（学習院大学学長）「当時は敗戦の年、１，０００万人が餓死するんではないかと噂されるほどの酷い状況でした。こうした状況の中で、国民を食わせていかなきゃいけない。国家の主権を回復せねばといっても主権は奪われています。通商貿易一つするにしても、全て占領軍の許可を受けなければならない。今では主権があるのが当たり前で想像しにくいですけど、当時は負けた現実というものを日本国民誰もが、いやというほど思い知らされていました」

宮崎哲弥（評論家）「やっぱり占領下にあるというのは、言論の自由を初めとして様々な屈辱的な経験に甘んじざるをえない。というのも、生活の基礎すら戦勝国に依存せざるをえないし、その戦勝国にさまざまな形で、制限を加えられる。これは食糧だけではない。安全保障だって依存しなければならないし、憲法は出来たものの軍備を放棄しております。じゃー一体誰が安全保障を担保していくのかという問題がある。講和に向けてのハードルは、まだまだ一杯あったということです」

司会「小谷さん、そういう中で吉田は？」

小谷「池田ミッションという自分の腹心を送り込んで交渉を開始しますね。吉田が池田をアメリカに送る際、情報漏えいというか、国会に知られるのを避けたかったけれど、まず何よりもＧＨＱにこちらの真意を知られるわけにはいかなかった。吉田の徹底した秘密的なやり方は、戦前の日本外交の反省からだと思います。

戦前、例えば日本の外務省が何かをしようと思って、公電を、例えばワシントンなりロンドンに送ろうとすると、必ず日本陸軍が其れを裏から傍受解読して外務省がやろうとする事の足を引っ張って、妨害するという事を繰り返しておりました。これに対する反省もあって取りあえず、池田を送って様子を探るということから始めたのだと思います」

対日講和に向かって本腰をあげたアメリカ。その特使に指名されたのが共和党の大物ジョン・フォスター・ダレス。ダレスは反共主義に対する強硬な姿勢でも知られていた。

昭和25年6月21日、ダレスが予備調査のため来日。吉田との会談直前、ダレスは記者団に反共主義としての顔を顕にした。

ダレス「世界は今、不幸にして2つの世界がある。それは自由の世界と囚われの世界であり、若しも日本が自由の世界を選ぶのであれば、日本は第一に自力を持って侵略の危機に対処しなければならない。その場合のみ自由社会は日本を助けるであろう」と。ダレスは日本に基地の提供だけではなく、再軍備を求める意向を示したのだ。吉田はその要求にどう対処したのか？

ダレスの母校（プリンストン大学）に、この時の会談を回想した吉田の肉声のテープが残されていた。吉田は英語で『ダレスとの会談では、予想した通り再軍備の件を持ち出されてきた。私は断った。日本はとても再軍備できる状態ではなかったからだ。日本は貧乏のどん底だった。戦前の過ちは軍備の重さが引き起こしたものだから』と。

独立国が自衛のための軍隊を持つことは当然、と考えるダレスは、吉田の返答に当惑したという。しかし戦前の過ちを知り、何よりも日本の経済復興を優先させたい吉田にとって再軍備の負担は大き過ぎた。両者の初会談は平行線に終ったのである。

その3日後のこと、思わぬ事態が起きた。

昭和25年6月25日、突如、朝鮮戦争が勃発した。38度線を越えて南下した北朝鮮軍。それに対してアメリカ軍を中心とした国連軍が迎え撃ち戦闘は激化した。冷戦下に始まった熱い戦争。アジアにおける共産主義勢力の台頭を、まざまざと感じたダレスはアメリカに戻り、早期の講和に反対していた国防総省を説得した。『日本人の中に反共への目覚めが生まれている今こそ、速やかに講和交渉を進め、日本を西側陣営に引き止めるべきである』と、そんなダレスに対して国防総省は、有事の際、日本の軍隊がアメリカ軍と行動を共にする

ことを要望したと言われている。
一体、どの程度の軍隊が想定されたのであろうか？これは昭和25年10月、国防総省が密かに纏めた極秘文書である。そこには、ソ連軍に対し10個師団の日本軍がアメリカ軍と共に戦うと記されていた。アメリカ軍の一個師団は3万2，500人。つまり、30万を超す軍隊の創設が日本に求められていたのだ。現在の日本の自衛隊はおよそ22万だから、ダレスに托された国防総省の要求は苛烈なものだった。
昭和25年11月24日、アメリカ政府は対日講和七原則を発表した。そこでは独立後の日本が国際連合に加盟する事を念頭に、**『全ての戦争当事国は日本への賠償請求権を放棄すべきと、明示された。**吉田が望んでいた寛大な講和に添う内容だった。また日本の安全保障についてもアメリカとの間に継続的かつ協力的な責任があるとされ、暗に、アメリカ軍の駐留の継続が刻まれていた。そしてダレスが再び日本を訪れ正式に講和条約を進めることも発表された。
――**知らせを受けた吉田の心の内は――。**
吉田「正式に講和交渉が始まることは、確かに喜ばしい。しかしダレス氏が来日すれば、再び、再軍備を求められるのではないだろうか？戦争放棄をうたった新しい憲法も、国民に受け入れられてきた今、手のひらを返えすように再軍備を進める事は難しい。しかし現実的には軍事力がなければ我が国の防衛が、独立が立ちゆかない上に、ただ闇雲に拒否するだけでは肝心の講和交渉が進まなくなるのではないか？」と、模索が続いた。
近年の研究で、吉田は再軍備をかわすために、さまざまな案を練っていたことが分ってきた。外交専門誌「フォーリン・アフェアーズ」編集部に、ダレスの再来日直前、吉田は一つの論文を寄稿していた。
――タイトルは『日本そしてアジアの危機』。
「朝鮮戦争においてアメリカのリーダーシップの下、結集した自由主義陣営の力に我々は胸を撫で下ろしている。有事の際、防衛力を持たない日本が放置されないことを、今回我々は十分に理解した。今後、日本は、国連を頼みとしていくことになるだろう」と。
これは国連安全保障案であるが、吉田は「対日講和七原則で示された国連加盟。それを突破口に、日本の防衛を国連軍に委ねるというのはどうか。実質的にはアメリカ軍がその役割を担うだろうが、国連を拠り所とした安全保障なら、アメリカも日本の立場を尊重し過酷な再軍備を控えるかも知れない」と考えた。その

一方で吉田は全く別の、発想の異なる案を準備していた。

当時の外務大臣公邸（東京都庭園美術館）において、昭和25年暮、吉田は外務大臣公邸に、元外務大臣有田八郎、東京大学法学部長横田喜三郎、及び元陸軍大臣辰己栄一など各界の有識者を招き、北太平洋一帯を非武装、または軍事制限地帯とする案を検討させていた。これは当時5回もの打ち合わせを経て外務省の事務当局が纏めた極秘のメモである。―「北太平洋地域平和及び安全の強化の為の提案」―日本列島と朝鮮半島を非武装地帯に設定、それを取り囲む三角形の中に、広大な非軍事地帯を設けるという北太平洋軍事制限案である。この軍事制限地帯では爆撃機などの配置も一切禁ずることも規定されていた。

柴田伸一さんは「この三角グラフの背後に吉田さんの再軍備拒否の強い意志を感じる」。「原則的に再軍備々々と言ってきた場合、こちら側としては、非武装路線を徹底して、こういう考えもありますよと、確実に言えるということは、吉田が相当の覚悟を持って、当人とブレーンの知恵を総動員して万端の準備をしたものではないでしょうか」と解説した。

吉田は、現実的な別の案も考慮していた。「アメリカ軍を日本の基地に継続して駐留させるという、安全保障条約をアメリカとの間で結び、その上で、ダレス氏の再軍備要求をかわす手はないだろうか。―日米二国間条約案はどうだろう―。もしかすると日本の事情に詳しいマッカーサーの支援を受ければ、強硬なダレスを説得できるかもしれない。事実、日本は『非武装の中立国として進むべき』というのが、マッカーサーのかねてからの持論であった。そもそもダレス氏が真に危惧しているのは、冷戦の中で日本が共産主義国家になる事ではないのか。貧しい日本で強引な再軍備を推し進めると、経済が破綻、その結果共産主義思想が浸透していくという理屈を、日本の事情に明るいマッカーサーと共に説得すれば効果があるかも知れない」という構想である。さまざまな構想が脳裏を去来するなか、吉田は再びダレス氏との会談に望もうとしていた。

ここで、吉田が練っていた三つの案を、改めて検討することにしょう。先ず**一つ目の国連安全保障案**は吉田が寄稿したものですけど、井上さん、これは国際事情も踏まえてどれだけ実効性があったのでしょうか？井上「平和憲法を、普通に読む限りでは、日本は非武装で、非武装の日本の安全保障をどうするかといった場合、国連安保に委ねる、そうとしか読めないですね。

しかし実効性という点を考えると、当時の国連は冷戦の主戦場で、安保理常任理事国であるはずの米ソが、協力するどころか、正面から対立していましたから、とても国連安保なんかが機能するような状況になっていない訳です。その意味では、実効性はないけれども、私は、戦後の日本の安全保障政策の究極の理想は国連安保なんだと、フオーリン・アフェアーズ誌に寄稿した吉田は深慮遠謀があったと思うのです」

小谷さんは如何ですか？

小谷「吉田は一回、池田をアメリカに送ってアメリカの様子を探っている。恐らくフオーリン・アフェアーズ誌に寄稿したのも吉田流の観測気球と言いますか、やっぱりアメリカ側の反応を見極めたいというのが、あったと思います」。

司会「**二つ目は北太平洋軍事制限案**です」。

宮崎「私の見るところ、この二つ目は、第一案の国連安全保障の一種のバリエーションでしょう、もっと領域を広げてみると、確かに軍事的非武装化され、軍事的に制限されたりするのを担保するのは、基本的には国連軍だという事になっている訳ですよ。違反する奴がいるかも知れないから、それを監視したり、何らかの軍事的行動を抑止するためには、国連軍だということになる。一種の拡大バージョンとして、日本周辺をこれだけ非軍事化しなければ９条のもとでの安全保障は担保で着ないのだという、一種のデモンストレーションのような感じがしますけどね」。

さー、そして三つ目です。

宮崎「**三ツ目が日米二国間条約案**ですけれども、最初の二つの案がアメリカとの再軍備交渉の過程でのカードになり得たかというと、余り、なり得なかったと思うのです。現実的には難しかった。ここで議論しただけでも、それは無理だとが分る訳で、当時のアメリカにとって、これを出されたからといって再軍備を引っ込める…そんなことは無かったと思うのです。やっぱり**日本としても本音は、結局アメリカとの二国間安保なんですよという事になります。**それでも先の２つが何故でてきたのかというと、今、一番重要ですぐ現実的なのが、３番目の日米安保なんだということを正当化する意味でも、最初の２つが必要だったと解釈したいのです。つまり、日本の安全保障は国連安保が最終的な目標で、それが未だ冷戦時代で、うまく機能していていないから、地域安保が機能するのを担保するために、二国間安保が必要だということをアメリカに対しても、国内に対して言う。そういう意味合いがあっ

たと解釈したいですね」。
司会「こういう中で、いよいよ吉田は本格的な交渉に入っていくことに。そこで吉田の選択とは・・」
昭和26年1月25日ダレスが再び日本の土を踏んだ。4日後の29日、三井本館の一室で第一回目のダレス吉田会談が行なわれた。会談は冒頭から激しい応酬となった。
吉田首相『講和条約においては、日本人の自尊心を傷つけない形をとり一刻も早く、独立を認めていただきたい』と述べると、ダレス『日本は独立々々と、そのことばかりを口にするが、その前に自由主義陣営の強化に如何いう貢献をするつもりか、お聞きしたい』と。吉田『日本の再軍備に関する真意をお知りになりたいのであろうが、今再軍備を進めれば日本の自主経済は不能になる。対外的にも、再軍備に対する危惧がある。再軍備は困難だと考える』。
ダレス『再軍備しないという方針は克服すべき障害があると言うことか？それとも日本が何もしないという、いい訳であろうか』と応酬した。
ダレスが見せる強硬姿勢を前に、国連案や軍事制限案は、現実性が乏しいと考えていた吉田首相は会談後マッカーサーの支援を求めて、ダレスと共にＧＨＱ本部へと赴いた。席上マッカーサーは『再軍備は日本経済の足かせになる』という吉田の説を支持したという。しかし講和は、私の専権事項であるというダレスは頑として主張を曲げなかった。吉田は追い詰められていった。
4日後の2月2日、吉田にとって決定的な出来事が起きた。経済界の人々を招いて開かれた昼食会の席上、ダレスが恫喝的な演説を披露したのだ。英語で『ただ望むだけでは平和はかちとれません。我々は皆、家に住み、財産を持っています。警戒もせず泥棒に荒らされるような人は全く同情に値しません』と。改めて強調されたダレスの再軍備を要求。それは、もはや無視できないものだった。
連日新聞の一面にはダレス吉田会談の行方が報じられていた。一刻も早く占領状態から脱したい。国民の期待も高まっていた。
翌2月3日吉田はついに決断した。大磯の私邸に外務省職員を呼び寄せた吉田は「近い将来5万人規模の保安隊を組織するという日本の案をアメリカ側に提示するように命じた」のだ。保安隊とは自衛隊の前身に当たる組織である。メモは英語に翻訳され三井本館に居たダレスに届けられた。その2日後の2月5日ダレ

スは日本側に次のように伝えてきた。

『先に発表した対日講和七原則に則ってアメリカは講和作業を進展させる』と。

戦後の日米外交史に詳しい、五百旗頭（いおきべ）真（熊本大理事長）さんは「この時吉田が一方的に、ダレスに屈したわけではないと考えている。ダレスにとって30万とか5万とかの数字は主要な関心事ではない、軍人ではないからね、吉田も、永遠に日本に軍備が要らないとは思っていないし、今後永遠にアメリカ軍に駐留してもらってね、それだったら、やっぱり半独立国で仕方がないですよね。あの時代の熱気の中で30万人とか朝鮮戦争に協力せよ、貢献せよとかにならないように落着いて、じっくり作る。大事なことだからというのが吉田の立場で、そこへ持ち込めたというのが、ほぼ意図した所じゃないかと思うんです」。

2月7日、吉田は、ダレスと最後の会談に臨んだ。席上、両者は2国間で、安全保障に関する新たな条約を結ぶ前提で、講和を進めることを確認した。また、再軍備に関しては日本国内や、周辺諸国で反対論が巻き起きることを考慮し、当面、公にしないことで一致した。講和への道筋がつけられたのである。

この難しい交渉に臨んだ吉田の手腕をどう評価しますか？

五百旗頭「初めから5万人の国防軍を作りますよ」と言ったらね「何を言ってるんだ、5万人などと非現実的なことを言って、30万要るよ」と言う話にいっちゃうでしょう。吉田は、最初から頑なにゼロ回答、そして最終局面で5万人というのを出して、もう数の事はもういいや、という思いにさせるよう持ち込んだ。これは帝国外交官らしい外交手法ですね」。

小谷賢（防衛省防衛研究所主任研究員）「いきなり5万と言う数をバンと出したのは相当値切ったなと言う印象はあります。ただ、それができたのは、やっぱり、恐らくダレスも日本と講和を結んで何らかの手土産を、要は自分の功績を作りたいと言うのがあって、吉田は、そこをうまく見抜いてサッと5万という、この案を出して取りあえず日本は再軍備するという意思はあるというところを見せたというのは大きかったと思います」

磯田道雄（歴史家）「進め方を見ると国会審議、やらないですよね。国民的議論もやらない。役所もＧＨＱも頭越しにして秘密交渉をやるわけですね。これが後世に残す影響っていうものも、我々考えなきゃいけない訳で井上さんから聞いてみましょうか」

井上（学習院大学学長）「敗戦国の首相が戦勝国から来た背の高い、マッカーサーよりも背の高いダレスと、対等にわたり合ってるかのように見える。本当に敗戦国民にとっては、吉田頑張っているぞという風に見えるわけです。交渉の中身は分らないし、また報道もしていないでしょうし、また分ってもどうしようもないけれども、互角に渡り合っているのは国民に、非常に自信を与えた。早く独立を回復して新しい日本を迎えたい。国民はそういう気持ちが非常に強かったと思います」

五百旗頭「ただ、その裏として今の水準から考えれば、内容について「講和条約はこう致します。日米安保条約は、こういう内容で遣ります」というふうな説明、そして了承を得る手続きはほとんどないんですね。それは結果として内容的に自由主義を取ったのも、市場経済をとったのも冷戦が終った今から見たら正しかったと、吉田の決断に救われた面があると思いますが、ただ、民主主義的な成熟という意味では、吉田はむしろ密約をやってでも独断でやっていく、そういうのを作っちゃったなという思いはしますね。ただワンマンじゃないとあの時代を乗り切れなかったのかもしれない。その傲慢不遜でワンマンの吉田、許せないというのはメディアの何時もの定番だったですけれどね。他方で、いま井上さんのおっしゃったように、相手が強者である場合、ダレスであれマッカーサー全盛期に吉田以外の首相はマッカーサーの前に出たら、目も正視できずという位に威圧されちゃうわけですね。ところが吉田だけが、マッカーサーが例によって一人で部屋を歩きながら独演の演説をするんですね。それを見て吉田はクックッって笑い出して、マッカーサーがびっくりして「何で笑うんだ」って言ったら「あなたの姿を見てると、動物園のオリの猛獣を思い出した」と言って一緒になって笑うとか。そういうふうな対等のやりとりができるのは吉田だけ、これは、マッカーサーの権限が絶大な時は国民には救いだったんですね」

司会「そういうことで、いよいよ吉田は、サンフランシスコでの講和会議を迎えることになります。

昭和26年2月11日、交渉を終えたダレスが日本を離れた。しかしダレスは直ぐアメリカには戻らなかった。講和交渉の進展に不信感を抱いていたオーストラリアやフィリピン（ロムロ外相）を説得するため外遊を続けたのだ。その後ヨーロッパにも足を延ばし、これから独立する日本に対して賠償金を求めないように、熱心に各国を説き伏せて行ったのです。

半年後の８月31日、日本全権団を率いた吉田は、講和条約が締結されるアメリカ・サンフランシスコに向けて旅立った。講和会議はサンフランシスコ市内に建つオペラハウスで行なわれた。参加したのは、ソ連、ポーランド、チェコスロバキアという共産陣営を含む52ヶ国。代表権問題を抱える中国や、戦時下の韓国などは招かれなかった。当初はソ連の妨害など心配されたが、**ダレスが行なった周到な根回しが功を奏し、会議は順調に進んだ。その結果、自由主義陣営に立つ48ヶ国が日本との講和に応じることになった。**

９月８日、日本は、サンフランシスコ平和条約に調印した。吉田茂首相により、条約を受諾する演説が日本語でなされた。英語で行う予定で準備されていたが、直前になって日本語で行うことになり、急遽原稿が差し替えられ長大な巻物式の急造原稿は現地のメディアからトイレットペーパーとも言われるほどの長い原稿だったという。

吉田は『**この平和条約は復讐の条約ではなく和解と信頼の文書であります。この公平寛大な平和条約を欣然受諾いたします**』と、拍手―声明文を読み上げました。ここに長く続いた占領が終わり、国家としての独立が認められたのである。その６時間後吉田はサンフランシスコ郊外に向かっていた。第６兵団駐屯地で行なわれる予定の、**日米安全保障条約の調印式**に臨むためだった。アメリカ軍の日本駐留継続と引き換えに、日本の安全保障をアメリカに委ねるという条約である。その際、吉田は会場まで同行していた池田勇人ら、全権団の一員には誰一人として署名させなかった。吉田は、その責任をたった自分独りで負ったのであった。ときに吉田は73才であった。

１９５１年（昭和26年）10月26日、衆議院が締結を承認。11月18日に参議院が締結を承認、内閣が条約を批准したのである。11月19日奈良に於いて昭和天皇が批准書を認証した。

一方ダレスは、その後アイゼンハワー政権の国務長官に就任。冷戦下のアメリカ外交をリードしていった。しかし重いガンを患い昭和34年５月死去。71歳だった（１８８８～１９５９）。

その２年後、吉田がダレスの事を回想した貴重な映像が残されているのが分った。『ダレスという人は、自分の信念を貫く為には全てを犠牲にする、最後は胃ガンだったが、ガンという病気を持っているにも拘らず、平和のため、正義のため東奔西走してくれた。世界を回りヨーロッパを回り説得して講和条約という所まで、

もっていってくれた。全くダレスのお蔭だと思います』
―昭和36年9月放送番組「吉田茂に聞く」から。
昭和42年10月吉田は89歳で世を去った（1878～1967）。
司会「あの日、二人の男が導き出した昭和の選択は、私たちに何をもたらし何を問い掛けているのだろうかということでサンフランシスコ平和条約を締結するまでを見てまいりました。五百旗頭さんはこの寛大の講和といわれますが、その点について、どんなふうにお考えでしょうか」
五百旗頭「寛大な講和というのをもたらした大きな状況っていうのは、矢張り冷戦だと思いますね。冷戦が始るまでは、旧敵国、日本と言うので日本の非軍事化とか、力をそぐ事を考えていた。それが冷戦という、もっと大きなテーマが出てきた途端に日本を味方にして育てようと。それが寛大さという事の土台になるという大状況は、これはもう明らかである。同時にダレスさんが、吉田もそうですが、第一次大戦の時のベルサイユ条約の現場にいて、ドイツに対して押し付けた平和といわれるけれど･･･ドイツは発言権を認められなかったんです。パリ会議では席に坐らせてもらえずに勝者だけが皆で如何しようかってやるんです。そうすると欠席した侵略戦争の責任者であるドイツというので、みんなの付け回しがドイツへいき、天文学的な賠償金になった。無茶苦茶な額になった。そういった悲運ということを吉田は避けたいと思ったでしょうし、ダレスは勝者の側にいたけど、その事がヒトラーを呼び起こすような、あの不幸をもたらしたと･･だから、ああいう過酷な事をしちゃいけない。従って第2次大戦後の日本に対しては、あんまり、みんな賠償要求するなと。**特に先進国アメリカとかヨーロッパはしないようにと。周辺のアジアの国は日本の経済回復能力をそがない範囲で、復興の余力の中ぐらいで、やるというように指導されるんですね。**そういう意味で歴史の教訓に基づく英知に繋がっていったということなんですね。この寛大さは非常にあり難かったし、立派な事だったと思いますね」
宮崎「ただ忘れてならないのは、寛大とは言え外交に100％はないですから、やっぱり譲った分は何処か自分の国へ負担が来る。そうすると、これは酷い話になる訳ですが、譲った負担の部分の殆どが沖縄に集中してしまう。それもあの戦争で一番ひどい悲惨な目に遭った人達の所へ掛かってくる。本土の日本人にとっては国際社会への復帰かもしれないが、沖縄の人にと

ってみれば、切り離されるっていう屈辱そのものの話になって、ここがやっぱりね・・・。**僕らが、沖縄の人もそうですけど、本土の我々に代償の自覚というものが本当にあるのか、これを忘れちゃいかんと思いますね**」。
司会「・・その大きな代償を支払って寛大な講和を手に入れた吉田ですが、**日米安保条約には、ただ一人でサインをしました。**井上さん、この吉田の思いを、如何いうふうに想像しますか」。
井上「この日米安保条約っていうのは片務的で不公平な条約でした。アメリカは日本を防衛する義務が無いのに、日本の基地を自由に使用できるというものでした。この不平等性というものを、一番よく分かっているのが吉田で、主権というものに対して非常に強い拘りのあった人が、こういう不平等な条約を結ぶ。それが日本にどんな影響を及ぼすのか、吉田はそれを最もよく分かっていたから後の世代が不平等な条約を平等に近づけてくれというメッセージも、間接的にはあったと思うのです」
宮崎「筋論からすれば講和によって独立を得られたと言いながら、独立というものは実は**真の独立ではないのではないではないか、という議論が起こっても可笑しくない状況なわけです。**ただし、実を取る姿勢、これが吉田のリアリズムで、革新勢力を中心として日米安保条約締結に対し反対する人たちはいるかもしれないけど、日本の国益のためには、これは「実」に違いないという決意というのが条約の署名に漢字で書かれた「吉田茂」という一見、孤独に見える字の中に漲っているような気がしますね」
　最後に吉田茂の人物を振り返って見ましょう。
宮崎「外交官と言うのは清濁どこまで併せて呑めるのかというところであって「清」は誰でも呑めるが「濁」をいかに受け入れるか、そこが外交の上で非常に難しい問題で、吉田はそれを、うまくやりきったんだと思います」。
五百旗頭「実は、憲法第９条が出来た時に、毎日新聞社の調査によると、８割の日本国民が第９条平和主義に支持を答えたんです。ところが独立を回復するとなったら、やっぱり軍備が要るだろうと軍備のない独立国はないからね、と言う常識論がわりと効いて、その瞬間には世論も再軍備容認の方に振るんですね。その時に吉田以外の誰が首相であっても保守政治家ですが、ご尤もなダレスの議論に従ってね、それでは再軍備を及ばずながらやらせて頂きましょう。ある人は心から嬉しくって引っ掛かるところはあっても、やらざるを

得ないと思ったでしょう。吉田だけが、あの瞬間に今まで見てきたような仕方で、勿体をつけて抵抗した。それによって何をもたらしたかというと、結局のところ経済国家としての戦後日本。明治の富国強兵から言えば**「強兵」抜きの「富国」と言う戦後日本文明を方向づけた。**吉田の特徴というのは稚拙なところ、間違えも枝葉では一杯あるけれど、白いキャンバスの上に太く「戦後の日本はこれだ」と、いう幹の線を引く勇気。それを引いた事によって、恐らく本人が思ってた以上に戦後の日本を染め上げたと思うのです」

宮崎「やっぱり、世界史の主要な潮流っていうものを見極める力っていうんですかね、吉田はその能力に長けていた。今の世の中は非常に多極化が進んで、絶対のスーパーパーワーや一強はない。潮流が非常に見え難い。こんな中で吉田さんだったら如何いうふうにこれを判断し見極めて乗り切っていくのだろうか、と考えながら今日の話を聞かせて頂きました」と、結んだ。

講和条約締結の直後、吉田茂首相が吐露した言葉に、冒頭にも述べたが『戦争では負けたが外交では勝てた』がある。国際外交の機微に疎い当時の自分には、謎めいて聞こえたが、銃を捨て75年も経った今、この稿を纏めてみると、ワンマン首相吉田茂の国を思う苦悩の秘策と、外交手腕にただただ敬服！！戦後どん底のこの国に光明を与えた正に救世主でありました！。

追　記

吉田茂（よしだ しげる）、１８７８年〈明治11年〉9月22日～１９６７年〈昭和42年〉10月20日）は、日本の外交官、政治家。

位階は従一位。勲等は大勲位。外務大臣（第73・74・75・78・79代）、貴族院議員（勅選議員）、内閣総理大臣（第45・48・49・50・51代）、第一復員大臣（第2代）、第二復員大臣（第2代）、農林大臣（第5代）、衆議院議員（当選7

回）、皇學館大学総長（初代）、学校法人二松学舎舎長（第5代）などを歴任した。卓越したリーダーシップを発揮した吉田茂元首相。聡明な頭脳と強いリーダーシップで戦後の混乱期にあった日本を盛り立てた政治家。そのふくよかな風貌と、葉巻をこよなく愛したことから「和製チャーチル」とも呼ばれたとのこと。

吉田首相は、憲法9条の戦争放棄について積極的に肯定する説明を行っています。具体的に吉田首相がどんな説明をしているかは、当時の議事録を読んでみれば分かります。当時の議事録は、衆議院の憲法審査会のサイトで公開されていますが吉田首相の答弁部分を以下に引用しておきます。

【昭和21年6月26日衆議院本会議における吉田茂首相の答弁より引用】

「次に自衛権に付いての御尋ねであります、戦争抛棄に関する本案の規定は、直接には自衛権を否定はして居りませぬが、第九条第二項に於て一切の軍備と国の交戦権を認めない結果、自衛権の発動としての戦争も、又交戦権も抛棄したものであります。

従来、近年の戦争は多く自衛権の名に於て戦われたのであります、満洲事変然り、大東亜戦争亦然りであります、今日我が国に対する疑惑は、日本は好戦国である、何時再軍備をなして、復讐戦をして世界の平和を脅かさないとも分らないと云うことが、日本に対する大なる疑惑であり、また誤解であります、先ず此の誤解を正すことが今日我々としてなすべき第一のことであると思うのであります、又此の疑惑は誤解であるとは申しながら、全然根底のない疑惑とも言われない節が、既往の歴史を考えて見ますると、多々あるのであります、故に我が国に於ては如何なる名義を以てしても、交戦権は先ず第一に自ら進んで抛棄することに依って、全世界の平和の確立の基礎と成す全世界の平和愛好国の先頭に立って、世界の平和確立に貢献する決意を、先ず此の憲法に於て表明したいと思うのであります」（拍手）。（※出典：衆議院本会議 昭和21年6月26日（第6号）――衆議院憲法審査会）

上記の吉田首相の答弁を見ても分かると思いますが、吉田首相はまず、憲法9条の規定について「本案の規定は、直接には自衛権を否定はして居りませぬが第九条第二項に於て一切の軍備と国の交戦権を認めない結果、自衛権の発動としての戦争も又交戦権も抛棄した」と説明していますので、当時の政府は、憲法9条の規定は直接「自衛権」を放棄したものではないけれども9条2項で「一切の軍備」と国の「交戦権」が認めら

れていないので、「自衛」のための戦争（つまり侵略戦争だけでなく自衛戦争）も、自衛のために他国と「交戦」することも「放棄した」ものであると考えていたこと、また、そのように国民の代表者である議員に、説明していることがわかります。つまり、当時の政府（吉田首相）は「憲法９条は侵略戦争だけでなく自衛戦争も含めた全ての戦争行為を否定しているもの」という解釈の上でその草案を帝国議会に提出していたわけです。そして、その理由については「従来近年の戦争は多く自衛権の名に於て戦われた」事実があり、当時の日本は世界各国から「日本は好戦国である、何時再軍備をなして復讐戦をして世界の平和を脅かさないとも分らない」という疑惑を向けられていることから、その疑惑を解消するために「如何なる名義を以てしても、交戦権は先ず第一に自ら進んで抛棄する」ことを決意した、と説明していますから、当時の日本が世界から「自衛戦争」の名の下に「侵略戦争」を繰り返す危険な国家であるとの疑惑を持たれても致し方ない事実が過去にあることを認めたうえで、その疑惑を晴らすためには「侵略戦争」だけを放棄するのでは足りず、「自衛戦争」をも放棄する憲法９条の規定が不可欠であると考えていたことがわかります。つまり、当時の政府（吉田内閣）が憲法９条に自衛戦争をも放棄する戦争放棄条項を規定したのは、そうした戦争を好む危険な国家であるという疑惑を晴らす必要が一つの要因として存在していたことが、この議事録の記述から明らかになるわけです。

―次に吉田の「地球の名言から」自衛隊諸君へ・・

君たちは自衛隊在職中、決して国民から感謝されたり、歓迎されることなく自衛隊を終るかもしれない。きっと非難とか叱咤ばかりの一生かも知れない。ご苦労だと思う。然し自衛隊が国民から歓迎され、ちゃほやされる事態とは外国から攻撃されて国家存亡の時とか、国民が困窮し国家が混乱に直面している時だけなのだ。言葉を換えれば、君たちが日陰者である時のほうが国民や日本は幸せなのだ。どうか耐えてもらいたい。忙しいとか、疲れた、は自慢にならん。忍耐がどんな難問にも解決策になる。今に立ち直る、必ず日本は立ち直る、戦争に負けても外交に勝った歴史はある。千年、いや四千年も生きていたい。しかし人は死ぬ。大志を抱けば天下何ものか！吉田の情熱が伺えます。

失言がきっかけで解散という状況に。吉田氏の発言でもっとも有名なのは、やはり「バカヤロー」でしょう。１９５３年の衆議院予算委員会において、吉田氏

は社会党議員からの質問を受けて答弁していました。国際情勢に関する質問について、自身の見解はどうなのかとしつこく問われ、吉田氏は少し熱くなってしまいます。社会党議員が「総理は興奮しない方がよろしい」と吉田氏を揶揄すると、これにたいして吉田氏は「無礼だろ」と返答、今度は社会党議員が「答弁できないのか君は」と言い返し、とうとうバカヤローという不規則発言になりました（小声で呟いたのをマイクが拾ったという。発言はすぐに取り消していますが）。今からすると、子供のケンカにも見えますが、一連のやり取りを正しく理解するためには、当時の政治状況を理解しておく必要があるでしょう。

吉田氏は、終戦から米国による占領、そして国際社会への復帰という激動の時代において、卓越したリーダーシップを発揮したカリスマ首相です。吉田氏の立場は、同じくカリスマ首相と呼ばれた小泉純一郎氏やあの田中角栄氏ですら到底及びません。吉田氏は当時74才、挑発した社会党議員はまだ40代ですから吉田氏の息子くらいの年齢です。ヤンチャな議員が、父親に近い歳の、頭脳明晰なカリスマ首相を捕まえて、あえて「答弁できないのか君は」と君呼ばわりして挑発したわけです。バカヤローと返した吉田氏も社会党議員もそれほど深刻な事態になるとは考えていなかったようですが、結局は自由党（自民党の前身）内の権力闘争も重なり、失言がきっかけで解散という状況まで突き進んでしまうのです。

ジョン・フォスター・ダレス（John Foster Dulles

（１８８８年２月25日～１９５９年５月24日）は、アメリカ合衆国の政治家。サンフランシスコ平和条約が締結された１９５１年９月８日、その同日に調印された日米安全保障条約の「生みの親」とされている。アメリカ第52代国務長官。　１９５３年１月21日～１９５９年４月22日の期間、アイゼンハワー大統領時代の国務長官を務めました。国務長官というのは日本で言えば外務大臣みたいなもので、政権の超重要職であります。実はダレス国務長官ですが、国務長官時代よりも、国務長官顧問の時代の方が日本と深く関わっています。１９４５年のポツダム宣言の後、サンフランシスコ平和条約と日米安全保障条約が締結されるまでの６年間、日本はアメリカの統治下にありました。その際、日本の独立に深く関わったのがダレス国務長官顧問です。日米安保の締結には、当時の吉田茂首相と何度も条件について話し合いを行っています。勿論

ダレス、つまりアメリカの主導で行われたわけですが、吉田茂ともおおむね意見が一致していたようです。

日米安保の草案をほとんど考えたことから「日米安保の父」と呼ばれています。竹島、対馬などを要求した韓国を突っぱねたり（突っぱねられた韓国は勝手に李承晩ラインを設定、竹島を占拠する）国務長官時代、北方領土に関しては「日本が歯舞群島、色丹島の二島返還で合意したら沖縄は返さないよ！」と圧力をかけてみたり（ダレスは共産圏が嫌い）、今も続く日本の領土問題に深く関わっているのです。ダレスが韓国の要求を呑んでいたら、現在、竹島だけではなく、対馬も韓国領だったかもしれませんし、北方領土について妥協していれば歯舞群島と色丹島の二島は、日本に返っていたかもしれません。そんなわけで戦後の日本にとって、良くも悪くも非常に影響力のあった人物で、アメリカの意向⇖ダレスの意向みたいな感があったようです。ただアメリカの意向を推し進めながらも日本の復興に愛を持って真剣に取り組んだと言われています。そもそも強い原爆反対者であったダレスは被爆国としての日本に同情していたのかもしれません。そんな彼は、親愛を込めて、「ダレスの親父」と呼ばれていたそうです。

のちに、高度経済成長を遂げていく日本にとって、**ダレスバッグは憧れのバッグ。**高所得者層を中心に非常に人気がありました。実はダレスバッグと言うのは、日本独特の呼び方で、欧米ではドクターズバッグとか、ロイヤーズ（弁護士）バッグと呼ばれており、欧米でダレスバッグと言っても、通じないそうです。当時の日本人がダレスに、そして、アメリカに強いあこがれを持っていたことを象徴するようなエピソードですね。ダレスバッグと言えば、ビジネスバッグの中でもかっこよさと高級感、ダンディ感がハンパでないバッグ。ドクターズバッグと言われ、お医者様の往診によく使われるバッグとしても有名です。他は弁護士さんとか会計士さんとか、はたまた一流企業のビジネスマンの部長職以上のおエライさんが使っているイメージがあって、とにかく金持ちが使ってるイメージ！

ちなみにダレス氏の弟さんはＣＩＡ長官。兄弟揃って長官って、なんだかすごいですね！！

２０２１・３・１日回想記

７０年前にタイムスリップ！